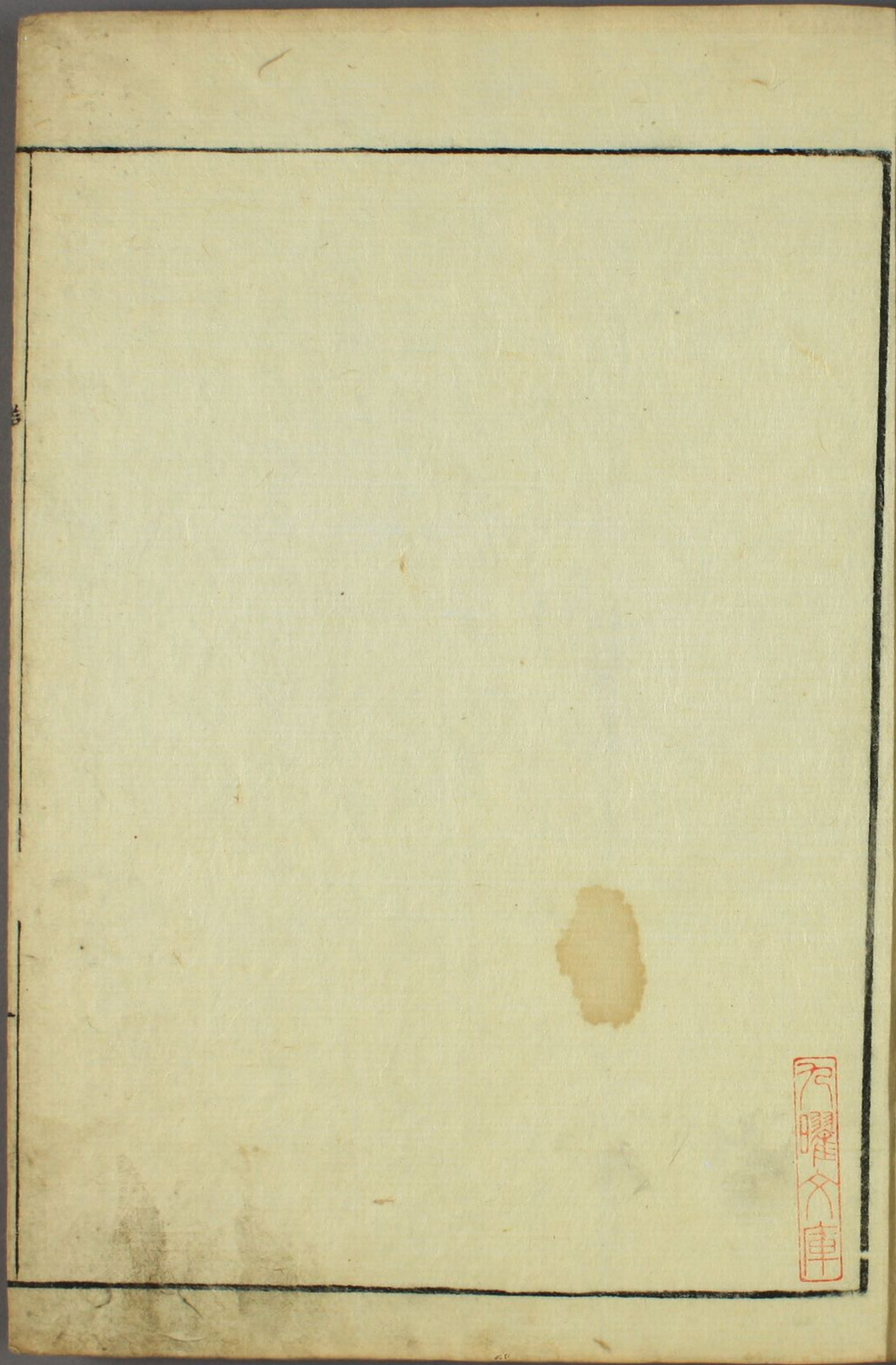




湖月抄

子





石渠文庫



若此宗

源氏十七歳の三月より冬まで乃事又くより以秋為

卷名也 よにいつていつとも人紫の福よひより野邊乃

あつこば平あく名とよりあ紫とけいさうり詞のみえ次  
孟毛詩正義各篇之例不過五其内偏奉則或上或下云くば是

ハ相或下云くべー花 式部中の姫君と紫の上と名づあんる

は藤壘の女御乃ゆり君かこらみよりてこぶれば此卷は秋の  
又べいあしてふのいふあくあへりあく人のいあよりよふ

とくもあああなりゆりも君あへりあくあくあくあく  
ふあうべーあり 師 此は上のあくと此をあくくく 免て事

きり

わくはく 細俗よふんた

わくはく 河癒病 痲

わくはく 孟のあくあくあ

わくはく 真言教陀羅尼の事なり

細花名の杜子義が詩ニ手提

觸膿血と云くと誦してと

木夫と云ふ也

わくはく 細鞍馬寺と云ふ河が

わくはく 寺鞍馬寺と云ふ昔四十九院わ

をるより院と云ふ同好

の山はつらわたりる人

へしてれやあらんぱ

わくはく 孟のあくあくあ

わくはく 真言教陀羅尼の事なり

細花名の杜子義が詩ニ手提

觸膿血と云くと誦してと

木夫と云ふ也

わくはく 細鞍馬寺と云ふ河が

わくはく 寺鞍馬寺と云ふ昔四十九院わ

をるより院と云ふ同好

の山はつらわたりる人

へしてれやあらんぱ







也身とて立公位とてさるるに  
 近來の中ねとてさるるに  
 奥守即日還拜は例可勤

深山の奥  
 山あはれ  
 明進曾也 孟去何比良情  
 久文情度よりあり  
 師 えんぬる  
 来しとて所えぬ 細素に  
 てつ世のすらいひもあけ  
 ぶあゆまふのさるる  
 ていりくはあまをかり  
 所来とて人あぶつてさる  
 人ぬるさるる  
 といふ不自由るれい

あはれぬ  
 山あはれ  
 明進曾也 孟去何比良情  
 久文情度よりあり  
 師 えんぬる  
 来しとて所えぬ 細素に  
 てつ世のすらいひもあけ  
 ぶあゆまふのさるる  
 ていりくはあまをかり  
 所来とて人あぶつてさる  
 人ぬるさるる  
 といふ不自由るれい

細素のさるる  
 孟去何比良情  
 久文情度よりあり  
 師 えんぬる  
 来しとて所えぬ 細素に  
 てつ世のすらいひもあけ  
 ぶあゆまふのさるる  
 ていりくはあまをかり  
 所来とて人あぶつてさる  
 人ぬるさるる  
 といふ不自由るれい

あはれぬ  
 山あはれ  
 明進曾也 孟去何比良情  
 久文情度よりあり  
 師 えんぬる  
 来しとて所えぬ 細素に  
 てつ世のすらいひもあけ  
 ぶあゆまふのさるる  
 ていりくはあまをかり  
 所来とて人あぶつてさる  
 人ぬるさるる  
 といふ不自由るれい







このつらげよとれ  
 じういれ尼とて誓の  
 むそとどそとてしんまそ  
 む事やうしねいさうの  
 さいちやうれいあ三人  
 ひしりハサ細えとて業  
 の上れめのかやうり

ゆいふぬふ吹きあめれ  
 山吹夕のるんむらう夜  
 花山吹の面うそくら  
 うら黄たうりまを敷や  
 まづこの面黄よこ  
 細やうり

うかひのあつこりあせ  
 細るこがうして虫とて  
 うらうらあへてあまの  
 くこりこあつこりあせ

うらうらあへてあまの

れいふもあつこりあせ  
 かういしめりしんまそ  
 尼のそとよつそとめうん  
 うらうらあへてあまの

んまういしめりしんまそ  
 れいふもあつこりあせ  
 つらうらあへてあまの  
 ひさたもてしんまそ

うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの

孟ひ尼よの似たりけり  
 打ちこし涼のさうり

あつこりあせ  
 上東門院の上東より公名

わたり栄花物語よこ  
 ありあつこりあせ

あつこりあせ  
 少せこれうら

つらうらあへてあまの  
 河事日本紀罪

らうらあへてあまの  
 ろうらあへてあまの

りうらあへてあまの  
 殿とてしんまそ

うらうらあへてあまの  
 仰西由初く馬るとのうら

あつこりあせ  
 たり

うらうらあへてあまの  
 たり

うらうらあへてあまの

うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの

うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの

うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの

うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの

うらうらあへてあまの  
 うらうらあへてあまの





か何過八度くわたりてさうり  
くく九過のまひあきまき 平吉  
去迄  
ぬれ 毛詩第一江有沔  
沔有沔之予歸不我過  
又山谷詩近人橫水五  
鷺野有鷺牛浮鼻過  
先皆平声也來心也  
れ れ れ れ れ

このはひろ おのの  
いものまよまよまよまよ  
ひ 天公笑師師忘目慈惠僧正  
被詠

い子細わつと い子細わつと  
く く く く く

て 細くした地も  
は は は は は

わ わ わ わ わ わ





かくありけりや

細侍のゆく女子の二人は

とく 孟の御よせて

の十余年はやりけり

あり。もは紫上の誕生を

る

よひのまゝ

尼の老の紫のまゝ

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

かくありけりや

細侍のゆく女子の二人は

とく 孟の御よせて

の十余年はやりけり

あり。もは紫上の誕生を

る

よひのまゝ

尼の老の紫のまゝ

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み









法花三昧とていふ

孟辰朝の事也 河三昧  
梵語也此云正受又名  
正定 法華懺法ハ智者  
大師聖行法門也 花止觀  
四種三昧ありといゆる常行  
常坐半行半坐非行非坐の  
四種也懺法ハ天台大師或説  
ニ遵式はくりに多くて六種の  
罪と懺悔とも法門なり

孟辰朝孟辰朝とていふ  
何ぞとていふ事ありや  
ていふらくは花原の原より  
花の跡のとていふ事あり  
よつていふ事ありは神ぬら  
なる山水とハ傍の原より  
よつていふ事ありは神ぬら  
なる山水とハ傍の原より  
の事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の

白草堂記云雜木異草蓋覆其上緑蔭蒙と朱實離々不職其名四  
特一色  
花のうもは錦とさるる今我もささるる作とをりみしつ 元輔集  
どるわりくもあつてとていふ事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の

細くハ功入りの入り

細原のまがらふ師尾君と云ふ  
流河院曉曉とていふ

法花三昧とていふ  
堂  
の懺法乃

神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の

若もあつていふ事ありは神ぬらなる山水の  
事ありは神ぬらなる山水の

孟辰朝の事也  
河三昧  
梵語也此云正受又名  
正定  
法華懺法ハ智者  
大師聖行法門也  
花止觀  
四種三昧ありといゆる常行  
常坐半行半坐非行非坐の  
四種也懺法ハ天台大師或説  
ニ遵式はくりに多くて六種の  
罪と懺悔とも法門なり

細茶のつらりのちりひ  
年恒山のひとみくしり  
孟千日鑑  
少くもさひ 匠氏をそとぬ  
珍今も松ふまそとままふ  
もくりにてよららちるえ  
よの初  
こまれいさん  
帝の赤心を悟りまひく  
そく珍系一ゆるよのそ  
たれいさんと白とそく

くしんげの 細傍の奇  
匠氏と優曇鉢華の比  
そく 明三千年に一度  
花さく必轉輪主出世  
三千年事如何私優曇鉢  
羅此云瑞應般泥洹經云  
爾時授内有尊樹主名優  
曇鉢者實金花優曇鉢樹  
有金華者世乃有佛  
孟原の由出いといひしゆえ

くしんげの 細傍の奇  
匠氏と優曇鉢華の比  
そく 明三千年に一度  
花さく必轉輪主出世  
三千年事如何私優曇鉢  
羅此云瑞應般泥洹經云  
爾時授内有尊樹主名優  
曇鉢者實金花優曇鉢樹  
有金華者世乃有佛  
孟原の由出いといひしゆえ  
一現現則金輪王出世云曇華ハ輪王出世の瑞之故号靈瑞華ハ人壽八万歳ノ時節金輪王四列を  
遠其時海水半城よりよりては花出現とくそと先法成とゆめよりより人よりより  
とこわつてよりい 何 法華久遠時一現のく 味前の傍於の奇輪王出世の心よりて匠氏より  
してよりい 何ハ匠氏ハ早  
下の市んとして佛お世は  
てそくま  
おく山の松乃 孟か山の  
匠戸とすれは明てま  
ぬ花の色とそく  
とくしてよりい 味  
味 聖のをよんとして  
鉢とよりとみて使ありて  
傍のちあくとそく  
後場時宜と不思とや  
師独鉢ハ匠人の常住の  
相なりまよりそくのい  
よ人あり

くしんげの 細傍の奇  
匠氏と優曇鉢華の比  
そく 明三千年に一度  
花さく必轉輪主出世  
三千年事如何私優曇鉢  
羅此云瑞應般泥洹經云  
爾時授内有尊樹主名優  
曇鉢者實金花優曇鉢樹  
有金華者世乃有佛  
孟原の由出いといひしゆえ  
一現現則金輪王出世云曇華ハ輪王出世の瑞之故号靈瑞華ハ人壽八万歳ノ時節金輪王四列を  
遠其時海水半城よりよりては花出現とくそと先法成とゆめよりより人よりより  
とこわつてよりい 何 法華久遠時一現のく 味前の傍於の奇輪王出世の心よりて匠氏より  
してよりい 何ハ匠氏ハ早  
下の市んとして佛お世は  
てそくま  
おく山の松乃 孟か山の  
匠戸とすれは明てま  
ぬ花の色とそく  
とくしてよりい 味  
味 聖のをよんとして  
鉢とよりとみて使ありて  
傍のちあくとそく  
後場時宜と不思とや  
師独鉢ハ匠人の常住の  
相なりまよりそくのい  
よ人あり  
聖徳太子のくしんげの  
細傍の引おわりの  
河本朝神仙傳よりて欽明天  
皇御宇聖徳太子六歳冬十  
月自百濟國經論律師禪師  
比丘尼以下と始て柱くれま

くしんげの 細傍の奇  
匠氏と優曇鉢華の比  
そく 明三千年に一度  
花さく必轉輪主出世  
三千年事如何私優曇鉢  
羅此云瑞應般泥洹經云  
爾時授内有尊樹主名優  
曇鉢者實金花優曇鉢樹  
有金華者世乃有佛  
孟原の由出いといひしゆえ  
一現現則金輪王出世云曇華ハ輪王出世の瑞之故号靈瑞華ハ人壽八万歳ノ時節金輪王四列を  
遠其時海水半城よりよりては花出現とくそと先法成とゆめよりより人よりより  
とこわつてよりい 何 法華久遠時一現のく 味前の傍於の奇輪王出世の心よりて匠氏より  
してよりい 何ハ匠氏ハ早  
下の市んとして佛お世は  
てそくま  
おく山の松乃 孟か山の  
匠戸とすれは明てま  
ぬ花の色とそく  
とくしてよりい 味  
味 聖のをよんとして  
鉢とよりとみて使ありて  
傍のちあくとそく  
後場時宜と不思とや  
師独鉢ハ匠人の常住の  
相なりまよりそくのい  
よ人あり  
聖徳太子のくしんげの  
細傍の引おわりの  
河本朝神仙傳よりて欽明天  
皇御宇聖徳太子六歳冬十  
月自百濟國經論律師禪師  
比丘尼以下と始て柱くれま



下ふは傍るき花のわたり  
この乃字よんけん  
しつていふあり  
孟<sup>孟</sup>のよとして説くめす  
つとみ尼云ははれし

さうの幸れ 細山幸に  
便ありく面白く何  
つとこのまれすかちや  
とらうらるのめいなり  
やまのし井にちり玉ま  
つてやまろくしぬまの  
くや催る樂葛城  
かたりいとしかりる  
細山幸のいりし殿上人  
とも保の山系ありけし  
さうし

ひちりさう  
孟華樂 在末摘花卷  
さうれ笛 孟 説文  
云笙ハ十三簧と云り  
師 女禍作笙又箫と云ハ大  
かりハ六三後長一尺四寸  
了樂器編小竹篔為之參  
差不齊象鳳之翼云云  
倍於さんと 孟 師陳  
賜樂書去或謂伏羲作或謂  
神農作或謂帝俊使晏龍  
作制長三尺寸六分象書之  
見廣六寸象六合強有五象  
五行腰廣四寸象四時前廣  
後狹象尊身上一圓下方象  
天地云云 孟白虎通云琴ハ以  
禁制淫邪正人心也 保氏  
らるの寸とつひひし  
のはゆのちかむらつれつと  
ゆりしつり倍於琴と  
わなづらにさめすむる  
さう

細 伯牙鼓琴而  
心のさう

てがらやうのほとまい  
とせひまうとあまも  
あつて根さして  
げよぶぐりやま  
んいあぬわざれこのま  
若のふまわてうけまり  
水のさぬわとあわつ  
しりかりまる笛より  
弁れ志願しうわ  
の寺れあやらや  
まらかりと保氏の  
て器よりおと人おは  
はひさくひさくひさく

わわりさゆいざ  
トよりまら例のひちり  
しりかりる  
琴とさびしりりりりり  
わひひしりりりりりり  
しりりりりりりりりり  
まひひひひひひひひひ  
さうしりりりりりりり  
しりりりりりりりりり  
とらうひちりりりりり  
とらうあつてしりりり  
あまさうしりりりりり  
人のれわり





うらもあふさねと

孟原のらよ妻れ上へはそ  
ありうくはまくれともそ  
とけううはひさつりても  
まゆり

細原と八幡のせせりて  
大との八奥の方よまよ  
師 大長時の開白なう  
原と妻れ一多ふね大  
まううう八車のまうま  
アまあ  
まうまうまうまうま  
まあ  
師 妻八原のらよつねと  
大原の懸をういさすう  
ふまうくうくうく  
まあ

うらうううううう  
海の方へ妻のまうま  
うら

うらまむごうもあふさねとひくされてま

大原のらよは原とのせまう

うらまふわが車よのせとまうり  
くがづううあつりてとまうり

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらううううう

奥入 妻とつねとあつねんよ

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう

うらうううううううううううううううう



けりてまればしりてを  
 一と 尼君紫の上  
 といてあまねてあか  
 ね味の思ふをいえわ  
 こそがねをえあまね  
 石取又くえとまの  
 ことのりし  
 西へけり 細とめては  
 こころをくまされを  
 親の身とまされし  
 夜のもの見も 細  
 こまをそむえつる梅  
 東のるれ見のうろ  
 細  
 細花を養む下松河海  
 いら 花河海よと文  
 るとまのあつる  
 要記よみしり艶書の  
 假令紫或紅の落候ニ  
 よやとまのしりて  
 じまひてまをりて  
 又落候一まよてま  
 砂金をのりてま

細  
 けりてまればしりてを  
 一と 尼君紫の上  
 といてあまねてあか  
 ね味の思ふをいえわ  
 こそがねをえあまね  
 石取又くえとまの  
 ことのりし  
 西へけり 細とめては  
 こころをくまされを  
 親の身とまされし  
 夜のもの見も 細  
 こまをそむえつる梅  
 東のるれ見のうろ  
 細  
 細花を養む下松河海  
 いら 花河海よと文  
 るとまのあつる  
 要記よみしり艶書の  
 假令紫或紅の落候ニ  
 よやとまのしりて  
 じまひてまをりて  
 又落候一まよてま  
 砂金をのりてま

一落候とやうく  
 いらして文と艶書と  
 年と書しといそら  
 ざりてまのりて  
 細  
 寺へのつりては  
 とまのりてまのり  
 せまのりてまのり  
 ぶちまのりてまのり  
 るまのりてまのり  
 細  
 まのりてまのり  
 今序は紫は後香山  
 とまのりてまのり  
 といつてまのり  
 に一まのりてまのり

細  
 けりてまればしりてを  
 一と 尼君紫の上  
 といてあまねてあか  
 ね味の思ふをいえわ  
 こそがねをえあまね  
 石取又くえとまの  
 ことのりし  
 西へけり 細とめては  
 こころをくまされを  
 親の身とまされし  
 夜のもの見も 細  
 こまをそむえつる梅  
 東のるれ見のうろ  
 細  
 細花を養む下松河海  
 いら 花河海よと文  
 るとまのあつる  
 要記よみしり艶書の  
 假令紫或紅の落候ニ  
 よやとまのしりて  
 じまひてまをりて  
 又落候一まよてま  
 砂金をのりてま

とてしるさえどとてさうしてをうらふ其もあらうとてさうしてをうらふ

あつ吹 晝 係のすハ業上と係よとてより、尼君の中をすて一向は花の上とてりて  
勅師 係の文は東のるれはもうらめくとあるとてあつ吹とてより、上は花の上  
つこのとら一のれはよふとてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
吹山の係のらゝぬるにふとてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

すかまねと 孟一様まど  
とあそくさみ吉吉ありあり  
河 和は片帆去帆と云句あり  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて

あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて  
あつ吹とてりて、あつ吹とてより、上は花の上とてりて











秋のまつり 孟あは七月  
このまつりとはまろくそに  
秋のまつりとはまろくそに  
つへー

月の母ーと秋 花はあひ  
このまつりとはまろくそに  
秋のまつりとはまろくそに  
つへー

孟是ハ秋上のうも君は里  
かり六条のふと  
うくらノ 本園こそ樹  
の茂こそ御あり

故あせろ又細えのソよ  
雅え原はよヤもことごと  
なり

あまらんのうらうらりあま  
飛上よいもうらうけりて  
くくくと文あうくろ光  
痛くして西発せしや  
とらよへりりつとまら  
とらんとも 元君とえま  
よばさよいそとくそ

よありとハ若りさうれ  
とらり  
わらうくくうらうらり  
細つらくをうらうらり  
いづらうらり

アトひらーとらうられど  
又若りさうられど佳原の  
山訪ひの若さ由とどく  
まんしとらうらりさうら  
西人ト入る

ゆくりなうらうらり  
孟不喜也 細うらうらり  
くくくと文あうくろ光  
痛くして西発せしや  
とらよへりりつとまら  
とらんとも 元君とえま  
よばさよいそとくそ

やうかりとらうらり  
庭若く肉は方と云らん

庭若く肉は方と云らん

庭若く肉は方と云らん

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

あまらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり  
まらりばくしてなびいそら  
とわおのびるあまらり

孟

孟

孟

孟

孟

孟

孟

孟

孟

孟

孟



らぬと云はれぬ由きとて  
 ばせすてしとていふくは  
 世のふしとていふくは  
 一とていふ不審とていふ  
 うつとてこのまよはり  
 此衆の初へ孟尼君とて  
 まつとていふくは  
 孟尼とのほとていふ  
 とていふくは  
 孟尼へのまよはり  
 孟尼へのまよはり

孟尼へのまよはり  
 孟尼へのまよはり  
 孟尼へのまよはり  
 孟尼へのまよはり

知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは

知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは

おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは  
 おひとていふくは

知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは

知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは  
 知原の用意とていふくは



うらた日はあつたてをせかり  
せむんのうらたつて 世間の通れられとて  
二沙息不 知桐壺のよめ  
よとみれうけのよめを  
思ひて 牡丹花みよまを  
号せうらうまをともす  
きもつりみ明る甲を  
うさこ懐胎ありてあり  
し号せうらうまをともす  
縁はそれよとて  
のよめを

うらた日はあつたてをせかり  
せむんのうらたつて 世間の通れられとて  
二沙息不 知桐壺のよめ  
よとみれうけのよめを  
思ひて 牡丹花みよまを  
号せうらうまをともす  
きもつりみ明る甲を  
うさこ懐胎ありてあり  
し号せうらうまをともす  
縁はそれよとて  
のよめを

二沙息不 知桐壺のよめ  
よとみれうけのよめを  
思ひて 牡丹花みよまを  
号せうらうまをともす  
きもつりみ明る甲を  
うさこ懐胎ありてあり  
し号せうらうまをともす  
縁はそれよとて  
のよめを

うらた日はあつたてをせかり  
せむんのうらたつて 世間の通れられとて  
二沙息不 知桐壺のよめ  
よとみれうけのよめを  
思ひて 牡丹花みよまを  
号せうらうまをともす  
きもつりみ明る甲を  
うさこ懐胎ありてあり  
し号せうらうまをともす  
縁はそれよとて  
のよめを



みぢかきしるものしるも  
我も他人と別ひ別入  
くもわくぬめり

くひくしと人ととせとま  
うてをうて

葉上ゆさるさふあうて  
はくしと保とあせうま  
あててうめあ夜さう  
んんとのあひととら  
あ

さそふうかたり  
益 卒 保 保  
細 保

これバをううううあ  
ととととととと

細 保 後 世 よいさういふ  
ひたさしつさまらう物と  
乳母のうい

細 保 上 よいさういふ  
わうううううういふ  
いして髪とさうり髪な  
あううう 叶 葉上よいさう  
ちうけて髪とさういふ  
うまうう

今ういさうそとふと人  
尼君をうくうりあて  
い今う保氏そととと  
人ううそとととと  
とととと  
前よ人ほてあうて  
あうてととととと  
ととととととと  
あうて保氏のあううい

ゆれば保とさういふ  
ゆれば保とさういふ  
ゆれば保とさういふ

とらうううううう  
とらうううううう  
とらうううううう

よはあうねとととと  
よはあうねとととと  
よはあうねとととと

らうううううう  
らうううううう  
らうううううう

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと

あうううううう  
あうううううう  
あうううううう

まうううううう  
まうううううう  
まうううううう

まうううううう  
まうううううう  
まうううううう

まうううううう  
まうううううう  
まうううううう

あうううううう  
あうううううう  
あうううううう

ううううううう  
ううううううう  
ううううううう

まうううううう  
まうううううう  
まうううううう

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと

よつととととと  
よつととととと  
よつととととと

あうううううう  
あうううううう  
あうううううう

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと

ととととととと  
ととととととと  
ととととととと









けそいといとく人くともさし  
 ちよめがしり  
 けそのさよもさるるくなく  
 尾君みもさるれまもれ  
 ゆんよさるるさ  
 と  
 細又えの何く尾君の中  
 によさるるあよまの  
 西宮へいさくさるる  
 とさるるさるる

けそいといとく人くともさし  
 ちよめがしり  
 けそのさよもさるるくなく  
 尾君みもさるれまもれ  
 ゆんよさるるさ  
 と  
 細又えの何く尾君の中  
 によさるるあよまの  
 西宮へいさくさるる  
 とさるるさるる

けそいといとく人くともさし  
 ちよめがしり  
 けそのさよもさるるくなく  
 尾君みもさるれまもれ  
 ゆんよさるるさ  
 と  
 細又えの何く尾君の中  
 によさるるあよまの  
 西宮へいさくさるる  
 とさるるさるる

けそいといとく人くともさし  
 ちよめがしり  
 けそのさよもさるるくなく  
 尾君みもさるれまもれ  
 ゆんよさるるさ  
 と  
 細又えの何く尾君の中  
 によさるるあよまの  
 西宮へいさくさるる  
 とさるるさるる

たぐりもあつてあつて  
世に安んぶのころあ  
ふなめとてあつて

切つてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて

あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて  
あつてあつてあつて





びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん  
 びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん  
 びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん

びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん  
 びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん

びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん  
 びんがまねにのつれ  
 ころあにちやうくはびん

のびにちやうくはびん  
 もりてあにちやうくはびん  
 ろれどさてもびん  
 へまねにびん  
 ノ、まねにびん  
 せらりよまねにびん  
 物くちやんまねにびん  
 へいさちやんまねにびん  
 せまねにびん  
 車とやまねにびん

のびにちやうくはびん  
 もりてあにちやうくはびん  
 ろれどさてもびん  
 へまねにびん  
 ノ、まねにびん  
 せらりよまねにびん  
 物くちやんまねにびん  
 へいさちやんまねにびん  
 せまねにびん  
 車とやまねにびん





葉の茂るは流りくわたり  
もまわれとては葉と車  
よのせまみく  
よめひのしほもひま  
おく 河津が舟 葉よめ  
ぬひのしほもひま  
たれんとてくし首尾をり  
共アツの方へりあそび  
さぬたし切ささめてか  
約女のりー細衣架か  
いり引さめてし 師は後  
されハ衣術より切され  
りて

か細なる流りくわたり  
しほと 何となく二葉  
たれんとて母りくわたり  
さぬたし切ささめてか  
約女のりー細衣架か  
いり引さめてし 師は後  
されハ衣術より切され  
りて

しほと 何となく二葉  
たれんとて母りくわたり  
さぬたし切ささめてか  
約女のりー細衣架か  
いり引さめてし 師は後  
されハ衣術より切され  
りて

とてのりぬニ葉流ららるれば  
よめひのしほもひま  
おく 河津が舟 葉よめ  
ぬひのしほもひま  
たれんとてくし首尾をり  
共アツの方へりあそび  
さぬたし切ささめてか  
約女のりー細衣架か  
いり引さめてし 師は後  
されハ衣術より切され  
りて

とてのりぬニ葉流ららるれば  
よめひのしほもひま  
おく 河津が舟 葉よめ  
ぬひのしほもひま  
たれんとてくし首尾をり  
共アツの方へりあそび  
さぬたし切ささめてか  
約女のりー細衣架か  
いり引さめてし 師は後  
されハ衣術より切され  
りて





ねらみゆと 紀世のゆと  
わらうりうらうりうらうり  
業平母を討してけり  
うらうねいけいそゆ  
あまよと人のゆとん  
とよそまよ

うらうねとむちよ  
盛とうくももまぬり  
いんらん 細わくん  
何事もははしてこそ  
ひたもあふたれと人の  
根とよんうら肝あ

うらうねとむちよ  
盛とうくももまぬり  
いんらん 細わくん  
何事もははしてこそ  
ひたもあふたれと人の  
根とよんうら肝あ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

うらうねとむちよ

おいらつよはとんとん  
あーあ  
あつたのほく入堂上と目  
くまんとあめとのを後  
かとおりのうまはにさそと  
やま  
くまをそてあそとあつら  
一 面が細えうふまの  
せあてつううま  
うん

あつたが細えうまうりうり  
このうまうりうり  
あつたのほく入堂上と目  
くまんとあめとのを後  
かとおりのうまはにさそと  
やま  
くまをそてあそとあつら  
一 面が細えうふまの  
せあてつううま  
うん

あつたのほく入堂上と目  
くまんとあめとのを後  
かとおりのうまはにさそと  
やま  
くまをそてあそとあつら  
一 面が細えうふまの  
せあてつううま  
うん

あつたのほく入堂上と目  
くまんとあめとのを後  
かとおりのうまはにさそと  
やま  
くまをそてあそとあつら  
一 面が細えうふまの  
せあてつううま  
うん



